
空中散歩

葉月 あや

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空中散歩

【Nコード】

N2794A

【作者名】

葉月 あや

【あらすじ】

神秘は神話の時代の遺物。幻想は片隅に追いやられた時代。夢幻を追い求め、古文書学に打ち込む少年ユレミトは、国一番の学校にドベの成績で入学した。地方の村から上京したユレミトは、『空飛ぶ人間がいる』という妙な噂を聞きつけ、裏路地をふらふらしていた。そのとき通り魔に襲われた彼を助けたのは、脈絡もなく空中を漂っていた半陰陽の魔法使い、キラだった。それ以来、ユレミトはキラのことが気になり初めて……。ゲテモノ、恋愛、ファンタジ

どうしよう。

昨日、いきなり出かけましようなんて誘ったからいけないんだ。

ああ、すごく恥ずかしい。

やっぱり僕らしくないことなんか、しなければよかった。

大体あんな誘い方じゃ、デートまがいじゃないか。

引かれたって、仕方ないよな。だから、断られたんだ。

僕は朝日を避けるように毛布を被ったまま、頭を抱えて身を縮めた。
すると。

ジリリリッ

電話が鳴った。手だけ伸ばす。

「はい……」

覇気の無い声で答えると、受話器からのんびりとした声が響く。

「おはよう」

僕はがばつと起き上がり、落としかけた受話器をしっかりと握った。

「な、なんですか、キラさん」

そうなんだ、これ、キラさんなんだよ。

なんでまた僕の……ああ、もう、どう思えばいいんだろう。心臓が
ときどきする。

「ねえ、ユレミト」

キラさんは何を言うつもりなんだ。こわい、なあ。

「昨日のことなんだけど」

「……はい」

「10時に出版社前の駅で待ってるね」

「……はあ!？」

「じゃあ、また後で。南口改札にいてね」

そうしてキラさんは電話を切ってしまった。ぼくが何が何やらわからずに固まってしまった。いや、わかってるからこそ固まっちゃっ

たんだ。

10時40分。

思ったとおりって言うのか、キラさんは駅には来なかった。

「はあ……」

考えてみればおかしい話だよな。あんな人が、いきなり僕と出かけるなんてさ。

それにしても残念だな。今度こそキラさんの不思議な力について、詳しく聞くチャンスだと思ったのに。

「それだけ、だよなあ……」

それだけだ。この落胆は、僕の研究に対する熱意がさせるもなんだ。神秘を研究したいがための、探究心。

べつに、キラさんと遊びに行けなかったから落ち込んでいるわけじゃない。

ちらと時計をみる。もう帰ろう。踵を返そうとした。

「おはよ」

その声に、僕は肩を震わせた。うそだ、ほんとに、キラさんなのか。振り向くと、そこには息を呑むほど綺麗なキラさんがいた。この世のものとも思えないというか、まるで人じゃないみたいだ。

シンプルな服に薄化粧。いつもは短い黒髪に、ウィッグをつけて肩に流している。白い肌は冬の陽に透けてしまいそうだ。長いまつげが影を落とす。

「待った？」

真っ青な瞳を向けて、キラさんが言った。これで半陰陽なんて、誰が思うだろう。どう見たって、とびっきりの美女だ。

「ごめんね」

「い、いえ」

もしかして。

「僕、待ち合わせ場所、聞き間違えました？」

「うつん、あってるよ。南口改札」

「遅刻ですか」

「そうだよ」

謝っという、全く悪びれた様子が無いのが常人と違っている。でもいいんだ、来てくれただけで充分だ。

それに学校のキラさんも遅刻の常習犯だから、プライベートで足並み合わせてくるなんて、ありえなかったんだ。その辺読んで、出発時間を遅らせるべきだったか。

「とにかく、行きましよう」

僕はキラさんを促して、駅のホームに向かった。

こうして見ると、キラさんはもの凄く目立つ。キラさんはひとを見た人は、誰もが振り返った。

「なんだか、へんな感じです」

「こういう格好で会うの、あの夜以来だね」

「ええ」

僕らが初めて会ったあの秋の夜、キラさんはやっぱり女の人の格好をしていた。

あの辺りで人が空を飛んでいるっていう変な噂を聞いて、夜中ふらついていたところ、僕は通り魔に襲われた。そこを通りがかったというか、脈絡もなく上空をホウキで飛んでいるキラさんに助けられたんだ。

魔法使いなんていう、神代の物語に出てくるような架空の存在が、目の前にいることには、心底肝を抜かれたものだ。ていうか、驚きは続いているんですが…

「まさか、同じ学校の生徒だったとはねえ」

秋から首都の学校に通うことになって、入寮した夜の事だったんだ。そのときは気が動転して何も聞けなかったから、後になって会いに行っただんだ（と、いつてもどさくさ紛れでほとんど会話は無い。『きみ、誰』って言葉にやたらとショックを受けて、そのまま帰ってきてしまった。あのころはホームシックとかで、参っていたんだろーな）。

要するに僕はものの見事に忘れられていたんだ。それから何ヶ月も経って、こうして並んでいるなんて、信じられない。昨日、勇気出して、声かけて良かったな。

「べつに、忘れてたわけじゃないんだけどね」

「それはもう、いいですよ」

忘れられてたって仕方ないよ。僕って印象薄いみたいだし。

「そうそう、覚えてる？あの忠告」

キラさんは脈絡もなく言った。何のことはすぐにわかる。

「覚えてますよ、それは」

射抜くようにじつと見つめられて、『私の正体、口外したら殺すよ』なんて言われたら、忘れられませんかよ。すごく、怖かったし。

「あれ、本気だよ」

「わかってます…」

「でも、やっぱり君には必要なかったかもね。どっちにしろ口外するタイプじゃないもの。私、人相見ができるんだよ。ユレミトって、やさしい人なんでしょ？」

たしかにキラさんが半陰陽ってことも、ホウキで空を飛んでいたことも、吹聴してない。

そんなことが世間に知れ渡ったら、キラさんは窮地に追いやられるだろう。けれど、それは、言っても誰も信じないだろうとか、情報を独り占めしたいとか、そういう自分勝手な理由だってある。

「やさしいなんて、そんなことありません…」

するとキラさんにはっこり微笑んだ。そうやって見つめられると、すごく、すわりが悪い。

「でもね、そういう人にかぎって、そう言っただよ。だからいろいろ話してみたし、一緒に遊びに行こうって、思ったんだ。今日暇だったしね」

結局は気まぐれだということか。

「ところでどう？」

なんのことだろう。僕は下ろしかけた視線をもとに戻す。

「これ、似合う？」

キラさんは膝丈のスカートを触りながら、にこつと笑ってみせた。いきなり話題が変わったから、とまどってしまふ。

「それは…似合ってますよ」

「よかったあ。お気に入りなんだ、これ」

なんだかこの人は、中身まで女の子みたいだ。半陰陽で心がそうなら、もうほとんど女性でいいんじゃないだろうか。でも学校や世間じゃ、そうはいかないらしい。

キラさんがこの国に移籍したとき、半陰陽は女性扱いされないと知らされたそうだ。だから国立の上級学校に入るころには改名もして、以来スウィという名の少年として暮らしている。でも僕にとっては最初名乗られた『キラ』さんに変わりはない。

「結構、たいへん、なんですネ」

「そうでもないけど、こういう格好も、もつとしたいとは思っよ。今日はさ、出版社前が学校から遠いからよかったけど」

相変わらず、行く人はキラさんに視線を注いでいく。

「こんな地味な僕として、恥ずかしくないですか、キラさん」

それに成績だつてぱつとしない。国一番の学校の劣等生つてのも、惨めなもんだ。

「なに言ってるの？ユレミトはかわいいーよ」

「うれしくないです…」

「いいことじゃないの。自信持ちなよ」

自信、か。

「…あ、来た」

僕らは汽車に乗り込む。車内は空いていた。僕らは開校記念日の休日だけど、人々は普段どおりの生活をしている。

汽笛が鳴って、汽車は走り出した。

向かい合わせに座ると、キラさんは窓に手をかけて持ち上げた。強

い風が頬に当たる。風は、キラさんの長い髪を躍らせる。

「今日は風も冷たくないね」

「ええ…」

「天気もいいね」

「そうですね…」

なんだか、落ち着かない。聞こうとしていたこととか、会う前はいつぱい頭に浮かんでいたのに、いざ改まると、口が動かない。

ていうか、キラさんにとってどんな話題が楽しいのか、必死で会話を探しちゃって、インタビューどころじゃないんだ。

それに聞いたところで答えてくれるかどうかは別だ。

「あの、キラさん…？」

「なに？」

とりあえず、普通の話しよう。

「なんで僕の電話番号なんか…」

「ユレミトどころか、学年全部の番号知ってるよ。住所とか、家族構成とか、学校の内部機密なんかも」

「え」

「ランドバークの机から、名簿とかの書類をくすねたから」

「はああ！？」

ランドバーク教授は、キラさんの不真面目極まりない態度を忌み嫌っている。だからキラさんとは確執があるらしい。朝礼で教授が、ほとんど名指しでキラさんの批判をしたのはごく最近のことだ。

「そ、そんなことしたら大問題ですよっ」

なんかいきなり、普通の話題じゃなくなった。

「引き出しに鍵、かかってなかったもの」

「だからって」

「重要書類の扱いくらい、慎重にしないのは常識でしょ。悪いのは不手際な アホ教授だよ」

「でも、バレたら大変なことに…」

「表沙汰になんかなんないって。自分のアホがバレないように、極

力努めるんじゃないの？学校の信用にもかかわることだし」

「でも…」

「あは、いい気味だな。今頃真つ青だよあのアホ」

流れる風景を見つめながら、キラさんは頬杖をついて、悪魔的な微笑を浮かべながら　つぶいやいた。僕はいつきに青ざめていく。

この人って、もしかして、物凄く性格がひん曲がっているんじゃないだろうか。キラさんがこんな性格だってことは誰も知らないんじゃないかな。普段はすごく愛想がいいみたいだし、要するに要領が良さそうだから。

「でもそれって、キラさんが生活態度を正したら済む問題なんじゃ

…」

「テストもレポートも一応評価は高いよ？」

確かにやることなすこと、人並みはずれて出来すぎてしまうからか、教授の中には助手に望む人もいるくらいだ。本を出してみないか、という話も持ちかけられているらしい。

「でも遅刻、早退、欠席の常習犯ですよ。せつかく飛び級したのに留年したら意味がない…で、会う人ごとに言われてるでしょうけど」

「そうでもないよ」

「え」

「私、あんまり友達いないんだよ。寂しいな」

本性を知ったのことなら、なんとなくわかる。けど。

「いつも回りに人がいるじゃないですか」

「みんな、友達なんかじゃないよ」

なんだか胸がズキンとした。キラさんは綺麗だし、異常に成績がいーいし、得体がしれないから興味を抱く人が多い。普段は美少年で通っているけど、男女ともに色んな意味でのファンが多い。友達になりたいとか、恋人になりたいとか、ただ憧れてるとか。

なのに、その誰もが友達じゃないなんて、どういうことだろう。そんなの、なんだか冷たいよ。

いまの会話から察するに、難しいのはキラさんがひどくワガママで
気まぐれなのに、結構人当たりが良くて、優しいところなん
だ。じゃなきゃ人助けなんかしないだろうし、あんなにいつも人に
囲まれているわけがない。

けれど批判されたら思いっきり仕返しするし、だからといって僕が
説教しても気を悪くしない。一番厄介なのが、人をやたらと惹きつ
けるくせに、どこか拒絶しているってところだ。

僕の場合は偶然、詮索しそびれていたのがよかったのか、はつき
りした理由はわからないけれど、キラさんは割りと踏み込んだこと
も話してくれる。でも一步間違えばあの電話すらかかってこなかっ
たはずだ。それにしても。

「壁を作ってるのは、むしろキラさんじゃないですか」

友達がいなくて、それはキラさん自身が相手のこと、友達だと思
ってないだけなんじゃないかな。

「そういうんじゃないよ。友達って、対等なものだと思わない？あ
んなにヘコヘコされても困るよ」

また、ズキンとする。みんなは、惚れた弱みみたいなもので、ハナ
から対等でなんか、いられないだけなんじゃないかな。でも、キラ
さんはそういうのを嫌がってる。

「だってそれは、みんなキラさんと仲良くしたい、からですよ」

僕はあくまでファンとかじゃないけど、彼らの気持ちはわかる。こ
んな、なんだか凄い人と仲良くなれたら単純に嬉しいし、ちょっと
気圧されるのは当たり前だろう。

いや、僕だってもう立派なおっかけけども、とにかく彼らも僕も、
思いたくないけど紙一重の違いしかないんだ。彼らに対する壁は、
そのまま僕にも隔てられた壁のような気さえする。

「そろそろトンネルだって」

声をかけてきた車掌さんの方を向いて、キラさんは言った。車掌さ
んもキラさんをチラチラ見ている。

「じゃあ、窓閉めますね」

「ありがとう」

キラさんは僕を見て、綺麗に笑った。

僕は立ち上がり、窓を閉める。

もしかして、ちょっと違うのかな。僕は今、何故か一応その壁の前にいるけれど、ほんの少しのきっかけで、壁の向こうに置かれてしまっ、つまり簡単にキラさんにとっての、その他大勢になっってしまうような存在のような気がする。

どうということだろう。

なんでまたキラさんは僕と一緒にいるんだろう。ていうか、なんで僕はキラさんの気持ちに気になるんだろう。キラさんの気持ちを掴んで、神秘の研究にいかすため？だとしたら、僕こそが冷たいのかもしれない。

「……」

僕はキラさんのほうを向いた。キラさんは艶っぽく目だけで笑って、首を傾げて見せる。猫みたいだ、とふと思ったとき、こうして会っているのは、キラさんにとってはやっぱり

りただの気まぐれに過ぎないのかな、とも思った。

キラさんは、たまたま誘ってきた僕を相手に、暇つぶしに友達ごっこを楽しんでいるだけ

けなのかもしれない。じゃなきゃ、こんなシチュエーションは、ありえない。

考えがいたって、僕はため息をついた。あと一駅で、目的地に着く。

「うわあ、綺麗だねえ」

古城公園の門で、チケットを渡す。門をくぐれば、後はただ広い敷地だ。遠くに古の砦がいくつも見える。目の前には草原。日当たりがいいからか、今の季節でも鮮やかだ。左手には森、その中には蔦の絡まった古典的な城があった。

この公園は文化遺産の保護区で、有名な観光スポットなんだ。

「今日はやっぱり人が少ないね。思ったよりも、ずっと楽しめそう」
門の付近の城には結構人がいたけれど、ここの知名度から考えると
やはり空いているんだろう。

「キラさん、古城が好きなんですか？」

「大好きだよ。でも来る機会がなかったから」

もしかして、そういう単純な理由でキラさんは一緒に来たのかな。
まあ、どうにせよ良かった。キラさんが喜んでくれる。キラさん
の嬉しそうな顔をみて、嬉しくなる心が何故だかチクリと痛んだ。
また、胸がくるしくなる。

「行こう、ユレミト」

思考にトリップしていた僕は、はっとしてキラさんを見た。

キラさんは瑠璃紺の瞳を輝かせながら小惑的に微笑んだ。どうして
か、ひどく頬が熱くなって、僕はふいと視線をそらしてしまう。

「ユレミト、顔赤いよ」

やだな、赤面症勃発だ。たぶん、耳まで赤いんだろう。どうしてこ
んなに熱くなるんだ。

「ほんとに、おもしろいねえ」

そう言つて、なんとキラさんは僕の手を握つて、歩き出してしまっ
た。どうしよう、なんだかクラクラするよ。なにかしらの怪しい魔
法でも、かけられたんじゃないだろうか。

つながれた手は小さくて白くて、繊細だ。と思うと、めちゃくちゃ
強く活動しはじめた。心臓の動きにあわせて、体全体が小刻みに動
かされているようだ。ドクドク音が、頭にひびく。手に汗をかかな
いことを、切に願いながら、僕はうつむいていた。

そして、ヒールのあるブーツを履いても、僕よりも少し背の低いキ
ラさんの髪が僕の鼻の辺りで揺れて、香水かなにかのいい香りがし
てきたとき、これって世界で一番いい香りだとおもった。どうしよ
うもなく混乱しているのに、悪い気がしないのはなぜだろう。

けれど、反比例してひどく切なくなつた。キラさんは、どんなつ
もりでこんなこと、してるんだろう。

「見てみて、ほら、海まで見えるよ」

しばらく歩いたところにある、誰もいない古城の上で、キラさんははしゃいでいた。

円柱状の高い塔の端に立つて、一石ごとに上下しながら周囲をぐるっと囲む塀（つて言うのかな）に身を寄せて、低い部分から遠くを眺めている。

「望遠鏡持ってくればよかったなあ」

そう言つて眉をしかめるキラさんは、お城にいるせいなのか、ちょっとわがままなお姫様みたいに見えた。これでただの女の子だったら、僕はキラさんのこと、すぐに好きになっていたんだろう。

それもすぐに訂正した。キラさんが黙つてまた遠くを見つめ始めると、やっぱりその横顔はどこか冷たくて、ゾツとするほど美しかった。あんまり綺麗だから、僕とは住む世界が違うような気がして、寂しいような気がした。

と同時に、古いお城に住み着く昔の精霊がいたら、こんな感じなのかな、とロマンも馳せてみた。

ああ、そうか。

考えれば相手は魔法使いだ。どう考えたって僕とは違う。そう思うと、人として同じ目線で見えるよりも、すこし離れてみるほうが、気が楽だと気がついた。

それは、相手は同じ人じゃないんだから、キラさんの意向がどうか、考えるだけ無駄なんじゃないかと思えてきたからだ。キラさんは、人に似た人ならぬ者いっきょしゅいつとうそくなんだから、それはそういうものとして見るに限る。この人の一挙手一投足いっきょしゅいつとうそくに思いを馳せるのは、もうやめたほうがいい。

そうするとキラさんが人と距離を置くことも、ちつとも寂しいなんて思わない。僕に親しいのも、ただの気まぐれなのも、切ないなんて思いようがなくなる。仕方ないって、そう思えるから。

「ねえ、ユレミト」

視線はそのままに、横顔でキラさんは言った。僕はまたびくつと肩を揺らした。トリップ癖は、そろそろ直したいな。

「なんでしよう、キラさん」

「空を飛んでみたいとは、思わない？」

「へ？」

すると、キラさんは塀にすつと登り、僕に手を差し出した。

「な、あ、危ないですよ、キラさんッ」

「なにを言ってるの」

「ホウキが無いと、飛べないんじゃないですか!？」

「ちよつと安定が悪くなるだけだよ、飛べることに変わりはないし」

「ほら、手」

「え」

戸惑いがちに伸ばした手を、キラさんはさつと掴んだ。すると、

「う、うわ」

身体に浮力がついて、キラさんが軽く引いただけで、ゆっくりと塀の上に立たされてしまった。

「た、高い…」

めまいがする。強い風にもてあそばれる。

「じゃあ、飛び降りるよ」

「え、えええええ!？」

僕はとつさに手を離す。すると一気に身体に体重がかかり、バランスを崩しかける。

「おっと」

キラさんは再びぼくの手を掴んだ。

「危ないから、おとなしくしてよ」

そうして、切れ長の瞳をすこし細めた。

「じゃ、今度こそ」

「え、うわあああああ」

と、そのときだ。

僕の叫びはそこで止められた。

時が止まった。

まだ、飛び降りてはいない。

そうじゃなくて、キラさんが。

僕にキスしたんだ。

「……」

「黙った」

キラさんは妖しく微笑む。僕は目をぱちくりさせて、キラさんの顔を見た。

僕が呆気にとられている間に、キラさんは僕の背中に手を回し、一気に飛び上がった。

「す、すごい……」

「ユレミト、怖くない？」

僕は首をぶんぶん振った。

足元には、何も無い。遠くに海。下方には茂み。どこまでも広がるような草原。

空も、地上も、僕らには遠い。

僕らは空を飛んでいた。

風の音、鳥の声が、普段とは全くちがって聞こえる。

風はこうやって鳥の声を聞いて、鳥たちはこうやって風を受けてるんだ。

胸の中に、綺麗な空気が満ちてくる気がした。

ゆっくりと、地上が近づいてくる。

「2人だと、こうして降りていく事しか出来ないんだけど」

「充分ですよ……」

もう、充分すぎるよ。夢がひとつ、叶っちゃった。

地上に着いてから、僕らはしばらく草原に寝転んでいた。

背中に地面がある。地面に身体がついている。けれど、イメージすればすぐに、あの空を漂った記憶が蘇る。

そんな中、キラさんが僕の話を書いたから、この前呼んだ古文書の話なんかをしていた。

「…で、その神様は、宝石をもらう代わりに、言うことをきいてくれたんですよ」

「神様が宝石をもらってどうするの？コレクターなの？」

「違いますよ。その神様は、宝石が好物なんです」

「へえ、不思議だね」

「僕は、キラさんのほうが不思議です」

「そう？」

「そうですね、だって…」

なんて言おう。キラさんは、何もかも不思議だ。

僕がうなっている、キラさんは上体を起こして、寝転んだ僕の方に向きそのまま覆いかぶさった。

「キ…」

また言葉をふさがれてしまう。深く口付けて、吐息が漏れた。

「キラさん…」

いやになってしまふ。これは気まぐれなんだろう。

僕は顔を背けて、キラさんの肩を押した。キラさんは目を見開く。

「コレミトは嫌なの？」

嫌って言うか、なんていうか。

「じゃあどうして昨日、私を誘ったの？あんな赤い顔して…」

どうして？それは僕がキラさんに聞きたいことだ。どうして今、キラさんは僕のそばにいるんだろう。同じことを、キラさんが僕に対して思うなんて、思ってもみなかった。

「どうして？」

キラさんはもう一度聞いた。いつもの笑みは、その顔にはない。もう、なんて答えればいいんだろう。

「そっちこそ、何でそんなこと聞くんですか。昨日まで僕のこと、忘れてたのに」

「だから、忘れてなんかないよ」

「……」

「秋に、ユレミトが話しかけてきて、その夜には思い出したんだけど、そのあとユレミトは何も言ってこなかったから、そのままにしておいただけだよ。それから私は待ってた」

なにを、言ってるんだろう。待ってたなんて、そんなこと。

「で、昨日断ったのは……」

「断ったんじゃないくて、考えさせてって言ったでしょ。正直言うとただ単に、返事をじらしてみただけなんだけど」

「意味がないです。なんですかそれ」

本当に、よく分からない。僕は面食らって、首をかしげた。

するとキラさんは、にっこりと作り笑いをした。目は笑っていない。「よおくわかった。今日は、どうもありがとう」

言うなり、立ちあがった。そして去って行こうとする。どういふことなんだろう。

「キラさん」

僕は駆け寄り、とっさにキラさんの手を掴むキラさんは振り向いた。やっぱり、作った笑顔だった。

「キラさん……」

「私だつて気になってたんだよ。ユレミトがどうして昨日、チケツトくれるって言ったのか。でも、ユレミトの様子でわかった。ユレミトは、私のことを好きだから誘ったんじゃないかなったんだね」

好き、じゃない……？

「他にどういふ理由があつたのかこの際だから教えてよ」

「それは……いい、いきなり訳がわかりませんよ。これって単なる友達ごっこじゃないんですか？ ぼくは……」

それが嫌で、どうしようもなくて……。

「私は、デートだと思ってた」

キラさんは、小首をかしげた。愛らしい笑みが、ひどく冷たい。

「僕は……」

「嘘なんじゃないでよ」

僕はなにを考えていたのだろう。

そのときの、僕は。

あとで悔やんでも、悔やみきれない。

嘘じゃない、それは。

でも、真実でもない。

「僕は、研究のために、魔法使いのキラさんを気にしてました。それで…」

「誘ったんだね。ほんとに、よくわかったよ」

そうして今までで一番綺麗な、そして冷たい笑いで答えて、キラさんは去って行った。

そのときになつて、ようやく僕は気がついたんだ。

理由はよく分からないけど、キラさんが僕のことを悪く思っていなかったこと。

そして。

僕がキラさんを好きになつていたことを。

キラさんが半陰陽でも、ちょっと変わった性格でも。

魔法使いでも。探求心を抜きにしても。

僕は。

キラさんが好きだつたんだ。

けれど、もう遅い。

キラさんは去って行った。

キラさんを傷つけた。

僕は馬鹿だ。

なんでもっと早く気がつかなかったんだろう。

あと、ほんの数分。

間に合っていたら。

そうしたら、きっと。

僕は。キラさんは。

でも。

本当に遅いのかな。

僕はそこに、しばらくいてから考えた。

本当に遅いのかな。

本当に？

僕は、気持ちに気がついてから、何もしていないじゃないか。

それでいいのか？

答えは出ている。

いいわけなんかない。

あのキラさんのことだ、きっと壁の向こうに追いやったら、そう簡単には心を開いてくれないだろう。

でも。

僕はキラさんを傷つけてしまった。

それだけでも、謝りたい。

ちがう。

やっぱり。

本当は、それだけが、望みなんかじゃない。

キラさんの寂しそうな目。

あの目がずっと、気になっていた。

最後のあの目、冷たいだけじゃなかった。

だったら。

僕が、キラさんを幸せにするんだ。

それが僕の幸せだ。

自己中なのかな、この思いは。

自己中……。もしキラさんが、僕といることを望まないなら。

でも、それは。

また、キラさんに会わないとわからない。

僕がこうして考えても、わからない。

それなら。

明日、また。

勇気を出して、話しかけるんだ。

また、キラさんの心に近づけるように。
魔法使いが知りたいんじゃない。
本当はキラさんが知りたいって事を。
知ってもらんだ。

（後書き）

はじめまして。葉月あやです。

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。少しでも楽しんでいただきたら、力いっぱい光栄です。

ちよつとゲテモノなファンタジーで、妙な恋愛ものですが、一応短編の連作小説として、この前後にも、あれやこれやとエピソードがございます。今回の『空中散歩』はその中の一コマとして（出し方がおかしいですが）折に触れ、他のエピソードも投稿していこうと思っている所存です。機会がございましたら、お目通ししていただけると、嬉しく思います。本当に、ここまで読んでくださいます、ありがとうございますm（――）m それでは、またの機会に（> <）（ ）、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2794a/>

空中散歩

2010年10月28日08時05分発行